扇の的

与一は義経に命じられ、敵味方が見守る中、舟の竿先に付けられた扇の的を射ることとなった。

与一、※鏑を取つてつがひ、※よつ引いてひやうど放つ。
鏑矢を取って（弓に）つがえ、十分引き絞ってひょうと放つ。

小兵といふぢやう、※十二束三伏、弓は強し、
小兵ということで、（矢は）十二束三伏、（だが）弓は強い、

浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要際※一寸ばかりおいて、
（鏑矢は）浦一帯に響くほど長いうなりを上げて、誤りなく扇の要の際から一寸ほど離れたところを、

ひいふつとぞ射切つたる。
ひいふっと　射切った。

鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。
鏑矢は海に落ち、　扇は空へ舞い上がった。

しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、
（扇は）しばしの間は空中にひらめいていたが、

海へさつとぞ散つたりける。
さっと　散ったのだった。

夕日の輝いたるに、皆紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、
夕日が輝いている中に、真っ赤な扇で（金の）日輪が描かれているものが、白い波の上に漂い、

浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、舟端をたたいて感じたり、
浮いたり沈んだり揺られていたのを、　舟端をたたいて感嘆し、

陸には源氏、※箙をたたいてどよめきけり。
箙をたたいてはやし立てた。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、
感に堪えなかった（感動した）のかと見えて、

舟のうちより、①年五十ばかりなる男の、※黒革縅の鎧着て、
舟の中から、　年が五十ほどの男で、

※白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。
持った者が、　扇の立ててあった所に立って　舞を舞った。

※伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御定ぞ、つかまつれ。」
与一の後ろへ（馬を）歩ませ近寄って、　御命令であるぞ、射よ。

と言ひければ、今度は②※中差取つてうちくはせ、
と言ったので、　中差を取って（弓に）つがえ、

よつ引いて※しや首の骨をひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。
十分引き絞って　男の首の骨をひょうふっと射て、

平家の方には音もせず、源氏の方にはまた箙をたたいてどよめきけり。
音もなく（静まり返り）、

「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。
心ないことを。

※鏑…鏑矢。鏑は矢の先に付けると射たときに音が出る道具で、開戦の合図などに用いられた。
よつ引いて…よく引いて、という意味で、弓を十分に引き絞って。
十二束三伏…束は一握り（指四本分）、伏は指一本分の幅。
一寸…約三センチメートル。　箙…矢を入れる道具。
黒革縅…濃い色の革ひもで鎧の板をつづり合わせたもの。
白柄…木地のまま何も塗っていない白木の柄。　伊勢三郎義盛…義経に仕える重臣。
中差…箙に差した矢のうち、戦闘用の矢。　しや首…相手の首をののしって言う語。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 例に従って、次の言葉に含(ふく)まれる係りの助詞を□で囲み、変化している結びの部分に——線を引きなさい。

（例）さぬきの造(みやつこ)と[なむ]いひける

扇 は 空 へ ぞ 上 が り け る

(2) 本文に用いられている擬声語(ぎせいご)（擬音語）・擬態語のうち、次の音を表すものを選びなさい。

放たれた矢が風を切って飛び、勢いよく扇を射切った音。

ア ひやう　**イ** ひいふつ　**ウ** ひやうふつ　〔　　〕

(3) ——線①「年五十ばかり……持つたる」とあるが、この人物は平家方と源氏方のいずれの人物か。適当なものを選びなさい。

ア 平家方　**イ** 源氏方　〔　　〕

(4) ——線②「中差取つてうちくはせ」の主語に当たる人物を選びなさい。

ア 与一　**イ** 年五十ばかりなる男　**ウ** 伊勢三郎義盛　〔　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 与一が扇を射ると、鏑矢はしばらく空にひらめいた。

イ 与一が扇を見事に射切ると、平家は静まり返った。

ウ 与一が男を射倒(いたお)すと、源氏は舟端をたたいてどよめいた。

エ 与一が男を射たことを、心ないことだと言う者もいる。

〔　　〕